

者にまで高められる——。

善き人間は、トマスの場合、〈civis〉として国家公共の共通善に奉仕しつつも、超越的な最高善へと秩序づけられ、そこにおいてはじめて全きを得るのであり、「自然」と超自然とがパラドクスとって然るべき緊張を孕みながらも、〈caritas〉を軸としてひとつの均衡と統合がもたらされたことになる。そこには「超自然」を排除する「自然」はなく、その「自然」を完成こそすれ廃棄するような「超自然」もない——。いわゆる〈humanisme intégral〉の原型ともいべき古典的な型態がここに見られる。

### 註

- (1) 〈artes liberales〉とくに〈trivium〉については、〈dialectica〉の圧勝に終わったかに見られはするが、その過程における推移なり変容なりの実態を個々の具体的事例に即して辿ってみることも、13世紀「ヒューマニズム」を考える際の機縁たりえよう。〈grammatica〉ひとつとってみても、新たな装いのもとに独自の展開を見せており、その意義には無視しえないものがある。ダチアのヨハネスのごとき、あるいはエアフルトのトマスのごときひとつひとつの貢献がそれである。

---

意見 「生ける言葉」と13世紀のヒューマニズム

坂口ふみ

13世紀にヒューマニズムがあったかどうかということが問題になる場合、ヒューマニズムを古典の、特に文学的又は四学科的な教養という意味にとれば、それは13世紀の主要な関心ではなかったと言えよう。クレリカリズムに対するライシズムという意味にとっても、これも13世紀の主流ではない。12世紀の福音主義運動は13世紀では教職制の内に再編成され、または抑圧された。

しかし、ヒューマニズムを地上的個人的人間の独自の価値の尊重、また人間の持つあらゆる能力や可能性の尊重という意味に、またこうした全体の人間への視野に裏打ちされた、一面性や偏向への批判精神という意味にとれば、これは12世紀の古典

文化の再生と福音主義運動を通りぬけ、アラブ・アリストテレスの普遍主義への対決をも迫られた13世紀スコラ学において、ある新しい表現を得たように思われる。

古典ヒューマニズムの中心は、イソクラテスやキケロの語るごとく、言葉であった。人間を人間たらしめる言葉の能力を内容形式とも最大限に形成することが、古代ヒューマニズムの目的であった。言葉はゴルギアスの言うように「すべてにかかわる」ものであり、人間文化の全体を覆うものだったし、その言葉の局限化や硬化・非生命化による精神の局限化や硬化を防ぐものとして、対話と吟味が、ソフィストの *dissoi logoi* やプラトンのディアレクティケーの方法があったと考えられる。

それに対応して13世紀のヒューマニズムの中心はやはり同じ「生ける言葉」つまりキリストだったのではあるまいか。この場合の語り手は神であり、視点は人間から神に移ったかに見える。しかも、このように視点を人間を無限に超えるものに移し、現在の人間を墮罪の状態と見、その人間のために超越者が「全く人となる」ことを信ずる受肉の思想が、逆に人間というものの含み持つ世界をきわめて広いものとするとも見逃しえない。人間の持つ可能性に、いわば無限の次元が与えられる。

12世紀は、例えばフランスに見られるように、この「人となった神」の姿を新しい直観でとらえ、それがアラビアやアリストテレスの思想への対立という他の動因とも結びついて、ボナベントゥラのようなキリスト中心思想を生んだと考えられる。そこでは神の言葉であるキリストが、古代の言葉のごとく、再び人間の全体性の視野を確保するものとなる。彼は「全」として神学の対象であり、「内と外に書かれた書物」として物質界と霊界を包含し、あらゆるものの「中心」でもある。このようなものの似姿である人間も、小宇宙であり、あるいみで「全て」であり、かかるものとしては天使にも優る神の似像であり、受肉の器にふさわしい。ここには単に理性的靈魂を持つものとしての人間の評価ではなく、身体と靈魂の両者を持つ「全」としての人間の評価がある。そしてこの「全」としての人間の評価は最初の創造者たる神の言葉が最後の被造物たる人間と結合し、霊をも超える者が物質的体を持つという受肉の大規模な「全」の成就が宇宙の完成のための出来事であり、神の愛と力と知恵の最高の示現であるという思想によって支えられる。この思想はキリストの内に「我々の人間性が驚嘆すべき仕方高められ、解きたい仕方で神性

と結合されている」ことをも示す。

ボナベントゥラとは多くの点で対立させられるトマスにあっても、人間理性の光の自立、体の形相として体と不可分な靈魂やそれに独特な認識の理論などには、地上の人間の独自性と自立性が示されることも考えられる。又『神学大全』の第三部で、「人としての」キリストの救済性が強調され、あるいは「キリストの人間性を通して全人類が完成へと導かれる故に」キリストは全く人間的な認識をも持たねばならないと言われるとき、少くともキリストにおいては地上の人間性がそのままの形で高められていることが見てとれる。人であるかぎりのキリストが天使たちの頭であり、キリストの体を含む全人間性こそがその人間性の神への最大の結合の故に、天使の霊の内にさえも、恩寵と救いを結果すると語られる。また人間性が受肉において最高の完成へともたらされ、無限の尊貴性を持つに至るので、世の始めでも終りでもない時に受肉が起るべきだったのであり、この完成され高められた人間性を通じて、他の人間達は完成へと導かれるのである。

この「言葉」は人間のあらゆるロゴスの活動の範型であり究極の対象でもあるが、同時に神として無限に超越的であり、かつ人となったペルソナとして個別的・具体的なものでもあるので、この超越性と個別性の両面から、古代の言葉とはちがった仕方では、概念の枠組みによる思想の硬化を防ぐという「ヒューマニスティックな」役割を果たしたと考えられる。そうしたものとしてこの「言葉」は、ボナベントゥラで既に見られ、中世後期の思想家へつながってゆくアリストテレス批判の原動力ともなったと考えられる。